埼玉県内古墳出土の勾玉について（Ⅱ）

中　山　浩　彦

3　他の古墳出土の勾玉

次にここでは出土状態が不明瞭な勾玉について概観してみたい。

1　川口市高稲荷古墳（第３図39・40）

長さ75m、後円部高さ 9.5m、前方部幅27m、前方部高さ 6.5mの前方後円墳であったが、土取りのため消滅してしまった。埋葬施設は、後円部に長軸 3.5mの粘土槨状施設が検出された。

勾玉は、高稲荷古墳出土と伝えられてきたメノウ製のものが２点確認されている（註１）。39は3.9× 2.3× 1.3cm、40は 3.7× 2.1× 1.2cm。２点とも片面穿孔で、形態は「コ」字形を呈する。

2　浦和市白鍬宮腰第２号円形周溝墓（第３図41）

周溝墓は径12.4mで、墳丘部は削平され残存していなかった。埋葬施設は、中央やや北東寄りの地点で粘土槨と推定される土壙が検出された。

碧玉製勾玉１点が乳文鏡、ガラス玉などと共に出土している。2.2× 0.8× 0.6cmで、片面穿孔 である。形態は、「C」字形を呈する。時期は、共伴した土師器から６世紀前半と考えられている。

3　桶川市樋詰２号墳（第３図42～44）

川田谷古墳群樋詰支群に属する円墳であったが、墳丘が削平されてしまい規模等は不明である。

メノウ製２（42・43）、水晶製１（44）の計３点の勾玉が出土している。長さ 2.6～ 2.7cm、幅1.6cm、厚さ 0.7～ 0.9cmで、形状に差はない。３点とも片面穿孔で、形態は「コ」字形を呈する。時期は６世紀後半と考えられている。

4　桶川市熊野神社古墳（第３図45～50）

径約38m、高さ６～ 6.5mの造り出しをもつ円墳である。昭和３年の熊野神社社殿改築時に墳頂部が削平され、粘土槨と推定される埋葬施設が確認された。その際に、筒形銅器、碧玉紡錘車、石釧などの関東地方では傑出した豊富な副葬品類が出土した。

勾玉は、硬玉製４（45～48）、メノウ製２（49・50）の計６点が現存している。遺物発見当初には白色の勾玉が数点と鏡なども出土したと伝えられているが、その所在は不明である。硬玉製とメノウ製の勾玉では、形状・形態・製作技法について差異が認められる。形状では、硬玉製の長さが1.7～ 3.4cmと小形の製品が多いのに対し、メノウ製勾玉は 3.8、 4.9cmと大形である。48の１点だけは弥生時代からの系譜を引く丁字頭勾玉である。形態では、硬玉製が「C」字形を呈するのに対し、メノウ製は「コ」字形を呈する。また、硬玉製が全て両面穿孔であるのに対し、メノウ製は片面穿孔である。以上のように、硬玉製の勾玉には古式の様相が顕著である。古墳の築造時期は、４世紀後半と考えられている。

5　朝霞市一夜塚古墳

径50m、高さ 6.5mの円墳で、埋葬施設は木炭槨であった。方格規矩鏡、挂甲などと共伴してメノウ製勾玉が出土したが、所在は不明である。時期は6世紀前半と考えられている。

6　川越市多宝塔古墳（第3図51～53）

県道に分断されていて墳丘規模が不明の前方後円墳である。埋葬施設は、礫床粘土槨との説もあるが詳細は不明である。

勾玉が3点出土している。長さ 3.0～ 4.2cm、幅 1.8～ 2.3cm、厚さ 1.0～ 1.3cm。51・53の頭部に屈曲が認められるものの「C」字形に近い形態を呈する。時期は6世紀後半と考えられている。

7　川越市下小坂4号墳（第3図54）

後円部径30m、後円部の高さ 2.4mの前方後円墳であるが、全体の規模が不明である。埋葬施設には横穴式石室が検出されたが、詳細はわかっていない。

メノウ製の勾玉が1点出土している。 3.1× 1.8× 1.2cmで、形態は「コ」字形を呈する。時期は、6世紀末か7世紀初頭と考えられている。

8　坂戸市北峰7号墳（第3図55～58）

径約12.5m、高さ2mの円墳で、埋葬施設は玄室の平面プランが円形を呈する横穴式石室であった。

碧玉製1（55）、メノウ製3（56～58）の計4点の勾玉が出土している。長さ 2.9～ 3.6cm、幅 1.7～ 2.0cm、厚さ 0.8～ 1.0cm。形態は「コ」字形を呈し、片面穿孔である。時期は7世紀前半と考えられている。

9　嵐山町行司免1号墳（第3図59）

径約13mの円墳で、墳丘部は削平され現存していなかった。埋葬施設は、胴張りの横穴式石室であった。

メノウ製の勾玉が1点出土している。 2.7× 1.7× 0.8cmで、形態は「コ」字形を呈する。

10　東松山市附川5号墳（第3図60）

墳丘が削平され、規模・形態が不明である。埋葬施設には複室構造の可能性がある横穴式石室が検出された。

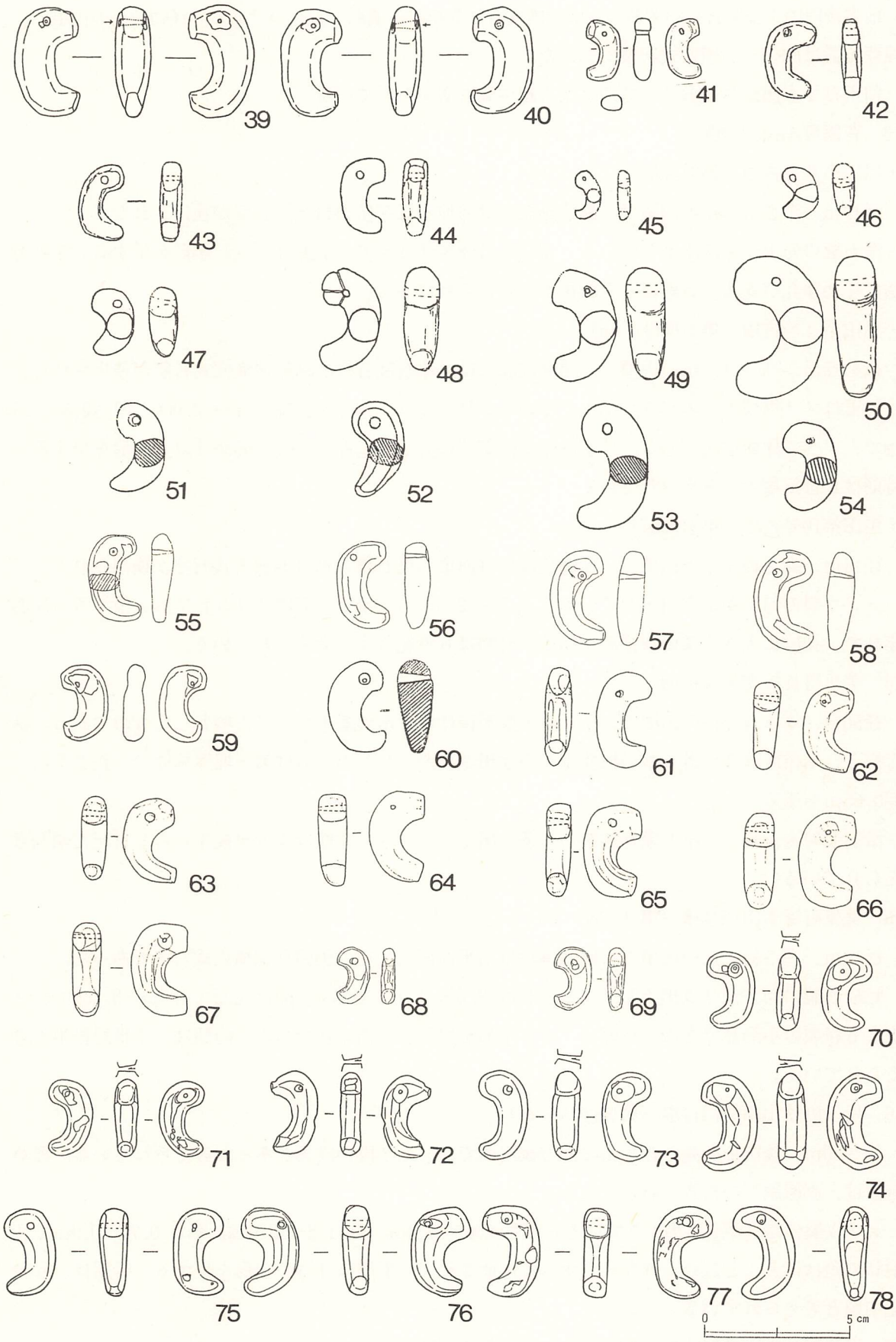
勾玉は水晶製のものが1点出土している。 3.1× 2.0× 1.2cmで、形態は「コ」字形を呈する。穿孔方法は、片面穿孔である。時期は7世紀前半と考えられている。

11　行田市将軍山古墳

長さ90m、前方部の高さ約8m、長方形の周堀が二重に巡る前方後円墳である。埋葬施設は、後円部から片袖型横穴式石室、前方部から木棺直葬の2つの主体部が検出されている。横穴式石室は明治27年に地元の人によって発掘されたが、遺物の詳細な出土状態は不明である。

勾玉は金製のものが1点出土したと伝えられているが、金製平玉などと共に所在が不明である。長さが3cm前後で、中空の勾玉であったことが記録されている。金製勾玉は、国内では和歌山市車駕之古址古墳出土のものが知られるのみである。時期は6世紀後半と考えられている。

12　川本町箱崎1号墳



第３図　古墳出土の勾玉（２）

前方後円墳１基を含む約30基の古墳で構成される箱崎古墳群中の一つである。径約10mの円墳で、埋葬施設は胴張りの横穴式石室であった。

勾玉は４点出土しており、時期は７世紀中葉と考えられている。

13　花園町黒田古墳群

・黒田第６号古墳（第31図61）

径17m、高さ 1.5mの円墳で、埋葬施設には河原石乱石積の横穴式石室が検出された。

滑石製の勾玉が１点出土している。 3.4× 1.8× 0.9cmで、形態は「コ」字形を呈する。穿孔方法は片面穿孔である。時期は６世紀後半と考えられている。

・黒田第９号古墳（第31図62～66）

径約15m、高さ 1.5mの円墳で、埋葬施設には河原石乱石積の袖無型横穴式石室が検出された。

勾玉はメノウ製のものが５点出土している。長さ 2.8～ 3.2cm、幅 1.7～ 2.0cm、厚さ0.8～1.1cmで、すべて片面穿孔である。形態は62～64が「C」字形に近く、65・66が「コ」字形を呈する。時期は６世紀後半と考えられている。

・黒田第10号古墳（第31図67）

径14m、高さ約１mの円墳で、埋葬施設には河原石乱石積の袖無型横穴式石室が検出された。

メノウ製の勾玉が１点出土している。 3.2× 2.0× 1.0cmで、形態は「コ」字形を呈する。片面穿孔で、孔尻に大きく深い抉込みがある。時期は６世紀後半と考えられている。

14　美里町長坂聖天塚古墳

径50m、高さ 4.5mの円墳で、小丘陵を整形後に約１mの盛土をして古墳としたものである。粘土槨３、木棺直葬３の計６基の埋葬施設が検出された。最大のものは第一埋葬施設で、長さ７m、幅0.65mを測る。

滑石製勾玉が第二・第五埋葬施設から多数出土しており、時期は４世紀後半から５世紀初頭と考えられている。

15　美里町塚本山13号墳（第３図68・69）

径12m、高さ約１mの円墳で、埋葬施設は扁平河原石使用の胴張り型横穴式石室であった。

蛇紋岩製の勾玉が２点出土している。68は 2.0× 1.1× 0.5cm、69は 2.2× 1.3× 0.6cmで、２点とも粗製の小形品である。形態は「コ」字形を呈し、片面穿孔である。時期は、７世紀後半と考えられている。

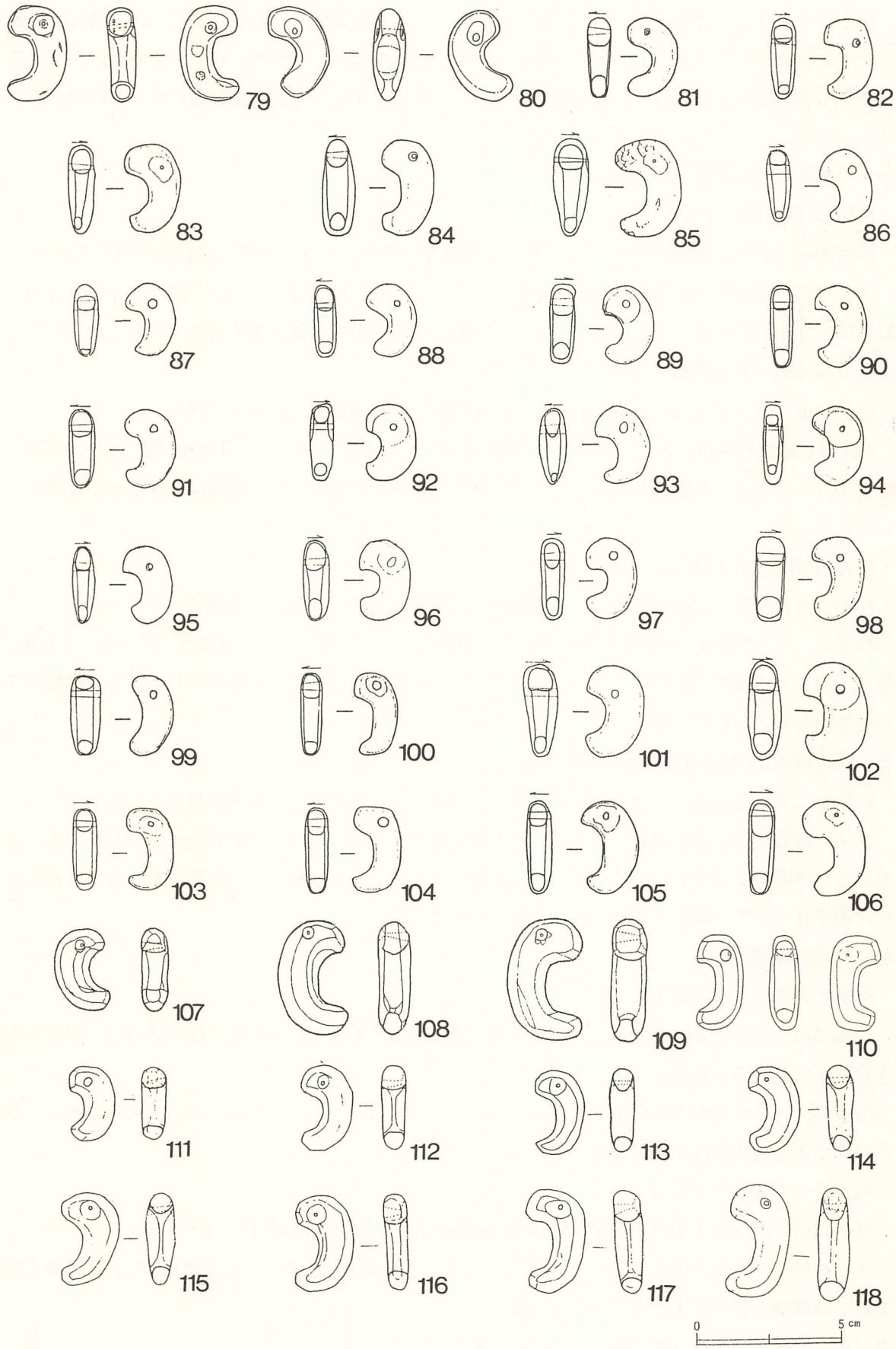
16　児玉町秋山諏訪山古墳（第３図70～74）

長さ60m、後円部の高さ約５mの前方後円墳で、２～３段の段築があると考えられている。埋葬施設は、直線胴型の横穴式石室である。

メノウ製の勾玉が５点出土している。長さ 2.6～ 3.3cm、幅 1.5～ 2.0cm、厚さ 0.7～ 0.9cmで、形状の差はほとんど認められない。すべて片面穿孔で、形態は「コ」字形を呈する。時期は、６世紀中頃と考えられている。

17　児玉町秋山庚申塚古墳（第３図75～78、第４図79～80）

径34mの二重周溝を有する円墳で、埋葬施設は胴張りの横穴式石室である。



第４図　古墳出土の勾玉（３）

勾玉はメノウ製５（75～79）、碧玉製１（80）の計６点が出土している。長さ 3.0～ 3.3cm、幅 1.8～ 2.0cm、厚さ 0.8～ 1.1cmで、形状の差は認められない。形態は、メノウ製のものがすべて「コ」字形を呈するのに対し、碧玉製のみ「C」字形を呈する。穿孔方法は６点すべて片面からである。時期は、６世紀後半と考えられている。

18　上里町帯刀古墳群

・原田二号墳（第４図81～85）

径約20m、高さ1.2mの円墳で、埋葬施設には河原石使用の胴張り型横穴式石室が検出された。

メノウ製の勾玉が５点出土している。長さ 2.7～ 3.3cm、幅 1.7～ 2.2cm、厚さ 0.8～ 1.2cm。形態は「コ」字形を呈し、片面穿孔である。時期は６世紀中葉前後であると考えられている。

・帯刀二号墳（第４図86～ 102）

径約12m、高さ 0.8mの円墳で、埋葬施設は胴張りの両袖型横穴式石室が検出された。

勾玉は、蛇紋岩製16、メノウ製１の計17点が出土している。長さ 2.5～ 3.4cm、幅 1.5～ 2.2cm、厚さ 0.7～ 1.2cm。形態は大半が「コ」字形を呈し、片面穿孔である。時期は７世紀前半と考えられている。

・帯刀四号墳（第４図 103～ 106）

径約17m、高さ 1.2mの円墳で、埋葬施設には胴張りの横穴式石室が検出された。

勾玉は、メノウ製３、蛇紋岩製１の計４点が出土している。長さ 2.8～ 3.3cm、幅 1.6～ 1.9cm、厚さ 0.8～ 0.9cmで、形態は「コ」字形を呈する。穿孔方法は、すべて片面穿孔である。時期は７世紀初頭と考えられている。

19　神川町№137古墳（第４図 107～ 109）

径18m、高さ 1.2mの円墳で、埋葬施設には胴張りの両袖型横穴式石室が検出された。

メノウ製勾玉は、小形のもの（ 107）と大形のもの（ 108・ 109）の計３点が出土している。大形の２点は明瞭な「コ」字形をするが、 107については「C」字形に近い形態を呈する。３点ともに片面穿孔である。時期は７世紀前半と考えられている。

20　神川町青柳古墳群

・海老ヶ久保10号墳（第４図 110）

径15.5m、高さ約２mの円墳で、墳丘には二重に巡る葺石が確認された。埋葬施設は、胴張りの両袖型横穴式石室が検出された。

勾玉は、メノウ製が１点出土している。 3.3× 1.7× 1.1cmで、形態は「コ」字形を呈する。片面穿孔である。時期は７世紀前半と考えられている。

・城戸野７号墳（第５図125）

径約14m、高さ約１mの円墳で、埋葬施設は袖無型横穴式石室と推定されている。

メノウ製勾玉が１点出土している。 3.3× 2.0× 1.0cm。形態は「コ」字形を呈し、片面穿孔である。時期は６世紀後半と考えられている。

21　児玉町長沖３号墳（第４図 111～ 118、第５図 119・ 120）

径約10mの円墳で、埋葬施設には河原石使用の胴張り型横穴式石室が検出された。

勾玉は、メノウ製９（ 111～ 119）、水晶製１（ 120）の計10点が出土している。長さ2.5～3.9cm、幅 1.5～ 2.1cm、厚さ 0.8～ 1.0cmで、長さと幅については大小の差が認められるが、厚さは10点ともに差はなく扁平である。形態は「コ」字形に近い形状を呈し、片面からの穿孔である。時期は７世紀前半と考えられている。

22　皆野町上の平古墳

墳丘部の大半が削平されてしまい、規模・形態等は不明である。勾玉と共伴して直刀・管玉などが出土したと伝えられているが、詳細はわかっていない。

23　蓮田市十三塚古墳

径22m、高さ３ｍの円墳で、埋葬施設は胴張りの横穴式石室であった。

滑石製勾玉が２点出土し、形態は「コ」字形を呈する。時期は７世紀前半と考えられている。

24　蓮田市ささら１号墳（第５図 121～ 124）

径15.5mの円墳で、埋葬施設は凝灰質砂岩を使用した横穴式石室と考えられている。

勾玉は蛇紋岩製１（ 121）、メノウ製３（ 122～ 124）の計４点が出土している（註２）。長さ3.0～ 3.6cm、幅 1.5～ 2.3cm、厚さ 0.8～ 1.1cmで、全て片面穿孔である。形態は、蛇紋岩製のものが「C」字形、メノウ製の３点が「コ」字形を呈する。時期は、７世紀前半と考えられている。

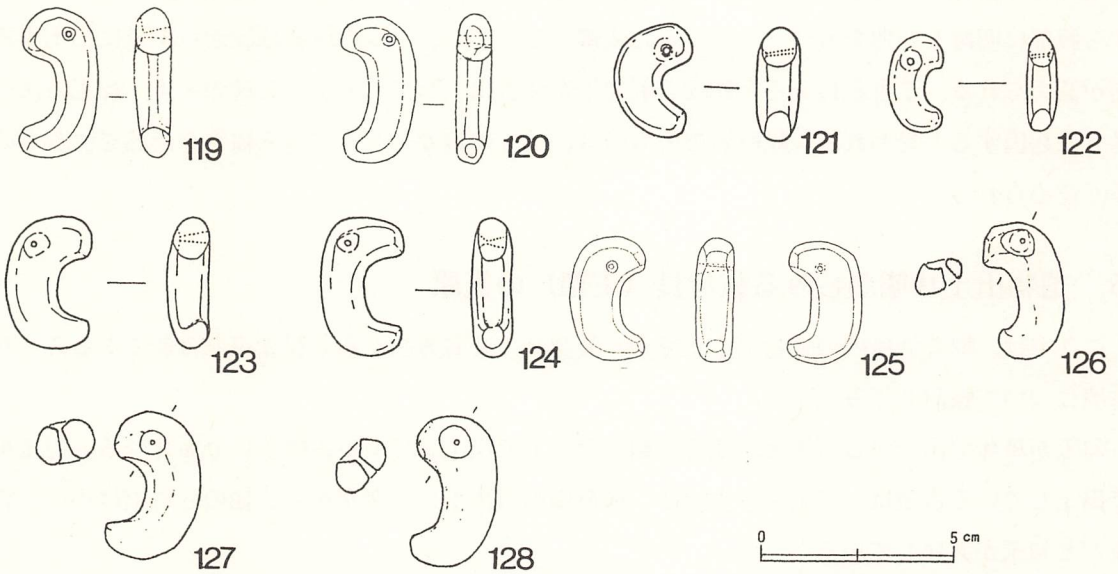
G　寄居町小前田古墳群

・小前田１号墳（第５図 126～ 128）

径約13m、高さ約３ｍの円墳で、埋葬施設には胴張りの横穴式石室が検出された。

メノウ製の勾玉が３点出土している。長さ 3.6～ 4.0cm、幅 1.9～ 2.3cm、厚さ 0.9～ 1.2cm。形態は「コ」字形を呈し、片面穿孔である。時期は、７世紀初頭と考えられている。

註１　柿沼幹夫氏は、勾玉の特徴から高稲荷古墳出土品ではなく、隣接した他の小古墳から出土し



第５図　古墳出土の勾玉（４）

た可能性が高いと考察している。筆者もこの勾玉は、6世紀後半頃の他の古墳から出土したものと考える。「新郷古墳群について」『天神山・宮脇遺跡』

註2　硬玉製と報告されているが、小川良祐氏の御教示により蛇紋岩製である可能性が高い。

4　勾玉の材質

勾玉の材質には硬玉、メノウ、碧玉、滑石、蛇紋岩、玉髄、ガラス、水晶、金の9種が認められる。出土点数が一番多いのはメノウの81点で、少ないのが玉髄、金の各1点である。

古墳から出土した勾玉で最古のものは、熊野神社古墳出土の硬玉製およびメノウ製勾玉で、4世紀後半に比定されている。中でも48の丁字頭勾玉は県内で唯一のものである。

硬玉は、縄文時代においては大珠、小玉、垂玉などの多種にわたって玉の石材として使用された。しかし、弥生時代以降においては勾玉にほぼ限定され、大阪府和泉黄金塚古墳出土の棗玉のような例外が僅かに散見されるのみである。色調は、青色、緑色を呈し、『魏志倭人伝』中の「青大勾珠二枚」の記述は硬玉製勾玉の可能性が高いとされる。形態は、断面が正円形の定形化した「C」字形をし、造りも精巧であるものが多い。硬玉製勾玉は、一括して多量に出土する例は国内では極めて少なく、共伴する他石材で作られた勾玉の中でも親玉的な位置にあったものと考えられている。硬玉製勾玉は他に稲荷山古墳と冑塚古墳から出土しており、前者は5世紀後半、後者は6世紀末から7世紀初頭に比定されている。6世紀前半までは硬玉の出土量が相対的に減少していくものの装身具の中では中心的な様相を示す。しかし、全国的にも6世紀中葉以降になると硬玉製勾玉は減少し、代わってメノウが勾玉の石材として多用されていく。7世紀以降になると硬玉製勾玉は激減することから考えると、冑塚古墳出土の硬玉製勾玉は異質である。

6世紀中葉以降になり、硬玉に代わり多く用いられたのがメノウと蛇紋岩である。古墳時代後期の勾玉では、その約7割がメノウ製で占められる。メノウは、赤色、白色の色調を呈し、古墳時代前期の青・緑色系の硬玉からの嗜好の変化がみてとれる。メノウ製勾玉の形態は、「C」字のものから腹部に明確な屈曲をもつ「コ」字へと変遷する。また、一つの埋葬施設から多量に出土する傾向が認められる。7世紀に入ると蛇紋岩製勾玉が多数出土しているが、石材の入手・加工方法の容易さに起因すると思われる。蛇紋岩製のものは、造りが雑で、丸みが消え扁平な形態をするものが多く認められる。

5　遺物出土状態からみる装身具（玉類）の復原

ここでは、埋葬施設内の遺物出土状態から装身具の装着方法がある程度復原可能であるA～Hの古墳について検討してみたい。

勾玉が単体で出土する古墳と、他の玉類とセットで出土している古墳とに分類される。勾玉単体で出土している古墳は、宮脇2号古墳跡、稲荷山古墳出土の2例があり、他の6古墳は小玉、管玉などと勾玉が共伴している。

勾玉単体で出土した稲荷山古墳は、豊富な武器・武具類が多数出土しているが、装身具には硬玉製勾玉1と銀環2が出土しているだけである。勾玉の出土状態は、被葬者の胸に当たると思われる

部分に鏡と共に埋納されていた。硬玉製勾玉は魂に通じ、鎮魂呪術として「タマシズメ」や「タマフリ」などの呪術に大きな役割を果たしていたと言われていることから、装身具というよりも宝器的・呪術的な意味合いを強く感じさせる。

他の玉類と共伴する例には、勾玉１に対し複数の玉で構成される例と、複数の勾玉と玉類で構成される２タイプに分類できる。前者では、吹上古墳、城戸野30号墳がある。後者には、植水１号墳、山王塚西古墳、冑塚古墳、小前田18号墳があげられる。植水１号墳では、出土状態から勾玉８点の間にガラス製丸玉、ガラス製小玉、土製漆玉が各数個入った一つの首飾りを構成していたものと思われる。山王塚西古墳では、石室奥壁寄りの頭部部分と思われる範囲から勾玉４（メノウ３、水晶１）、水晶製切子玉１、凝灰岩製丸玉５、ガラス製小玉２、土製臼玉１がまとまって出土している。小前田18号墳では、メノウ製勾玉９と滑石製丸玉３、ガラス製丸玉７、ガラス製小玉28が出土している。これらも数珠繋ぎをして一つの首飾りを構成していたと考えられる。

まとめ

古墳時代における勾玉の副葬状況から、装身具としての勾玉の他に、稲荷山古墳の例に挙げられる宝器あるいは祭器的な意味をもつと思われる勾玉の存在を考えた。勾玉は、縄文時代には個人の生命を守る装身具として、弥生時代においては権力の序列をしめすものとして考えられている。中でも硬玉製勾玉は拠点的集落や首長墓などから良質な製品が出土していることから、弥生時代中期以降にはガラスや碧玉よりも重宝されていたことが伺える。稲荷山古墳出土の勾玉は、その弥生時代的な思想を未だ残しているものと考えられる。６世紀前半までは弥生的な宝器としての性格が看取できたが、６世紀中葉から後期にかけてメノウが勾玉の石材に多用される時期には、勾玉のもつ意味が変化していく。群集墳や集落などから出土する事例が増加することから、宝器的な意味合いが薄くなり、小玉・丸玉などの玉類とセットになった個人的な装身具として、勾玉を所有する階層も拡大していくことがわかる。

本稿で疑問を十分に解決するまで至らなかったのは筆者の浅学にある。別稿では、勾玉の出土状態から勾玉の装着状態を具体的に復原し、勾玉の副葬に込められた意味を明らかにしていきたい。そのためには、人物埴輪の装着状態等からも比較検討する必要があり、そのことから性差、階級差、職業が識別可能であるかも考えねばならないと思っている。

【引用・参考文献】

朝霞市　1989　『朝霞市史』通史編

石塚三夫　1997　『中小前田２遺跡』寄居町遺跡調査会報告第14集　寄居町遺跡調査会

伊藤雅文　1991　「C　玉類」『古墳時代の研究』第８巻　古墳Ⅱ　副葬品　雄山閣

岩永省三　1997　『弥生時代の装身具』日本の美術第370号　至文堂

大塚初重　1965　『日本考古学年報』13

岡本健一　1997　『将軍山古墳』　埼玉県立さきたま資料館

桶川市　1979　『桶川市史』第二巻　原始・古代資料編
金井塚良一　1961　「南中学校校庭内古墳の発掘」『東松山市文化財調査報告第１集』　東松山市教育委員会
上里町　1992　『上里町史』資料編
川越市　1972　『川越市史』第一巻原始古代編
川本町　1989　『川本町史』通史編
木下尚子　1987　「３．垂飾」『弥生文化の研究』第８巻　祭と墓と装い　雄山閣
木下尚子　2000　「装身具と権力・男女」『女と男、家と村』古代史の論点２　小学館
後藤守一　1940　「古墳副葬の玉の用途について」『考古学雑誌』第30巻第７号　考古学会
小久保徹　1977　『塚本山古墳群』埼玉県遺跡発掘調査報告書第10集　埼玉県教育委員会
埼玉県　1982　『新編埼玉県史』資料編２　原始・古代
埼玉県県民部県史編さん室　1986　『埼玉県古式古墳調査報告書』
坂戸市　1992　『坂戸市史』古代史料編
塩野博　1967　『桶川町文化財調査報告Ⅰ－川田谷の遺跡と遺物－』　桶川町教育委員会
塩野博・小久保徹　1975　『黒田古墳群』　黒田古墳群発掘調査会
菅谷浩之ほか　1990　『秋山古墳群』児玉町史資料調査報告古代第２集　児玉町教育委員会・児玉町史編さん委員会
菅谷浩之・金子章　1980　『長沖古墳群』児玉町文化財調査報告書第１集　児玉町教育委員会
菅谷浩之・坂本和俊　1975　「美里村長坂聖天塚古墳の調査」第８回遺跡発掘調査報告会発表要旨
田村誠　1982　『神川村遺跡群発掘調査報告Ⅰ』　神川村教育委員会
富山県埋蔵文化財センター　1987　『ひすい－地中からのメッセージ－』
蓮田市教育委員会　1999　『蓮田市史』考古資料編Ⅱ　古代・中世資料編
藤原高志　1983　『ささら・帆立・馬込新屋敷・馬込大原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第24集　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
町田章　1997　『古墳時代の装身具』日本の美術第371号　至文堂
水野祐　1992　『勾玉』　学生社
美里町　1986　『美里町史』
皆野町　1988　『皆野町誌』通史編
村井嵜雄　1956　「武蔵国川田谷熊野神社境内所在の古墳」『考古学雑誌』第41巻第３号
山田尚友・宮崎由利江　1989　『白鍬宮腰遺跡発掘調査報告書（第２次）』浦和市遺跡調査会報告書第123集　浦和市遺跡調査会
嵐山町遺跡調査会　1987　『行司免遺跡－遺構図版編－』嵐山町遺跡調査会報告３　嵐山町遺跡調査会
嵐山町遺跡調査会　1988　『行司免遺跡－本文編－』嵐山町遺跡調査会報告４　嵐山町遺跡調査会
嵐山町遺跡調査会　1988　『行司免遺跡－遺物図版編－』嵐山町遺跡調査会報告５　嵐山町遺跡調査会